

山本泰次郎先生のこと（5）

山本先生は、いわゆる逸話の少ない方であったと思う。もちろんご家族の方々をはじめ、先生の集會に出ておられた方、先生の仕事を直接に手伝っておられた方々には、それぞれ、いろいろな逸話的思い出があることだろう。私じしんは先生の集會に出たわけでないし、「内村全集」と「山本双書」の仕事でかなりひんぱんにお目にかかることはあったが、それ以外にそう個人的におあいする機会があったわけではない。従って私は、どちらかと言えばやはり間接的に先生を存じあげていたわけであろう。

それでも先生から直接、個人的に伺ったお話や、忘れ難いお言葉など無いわけではない。その一つ一つはいまは別にして、やはり一番印象的だったことは。先生が話をされる時の態度というか、様子である。先生は、ひと度話題が福音のこと、信仰のこと、キリスト教のことに及ぶと、もう我を忘れて、夢中になって話されるのであった。これは心筋梗塞ご発病後も、いやごく晩年に至って少しも変わらず、伺う私共の方がご病気にさわらないかと、いつもハラハラしたものであった。ところが先生は、ご自分の関心外のこと、興味がおありにならないことになると急に無口になられ、また人の話もうつつに聞いておられるようなところがあった。それは何であるかと言えば、いわゆる世間話、世の中の事件だとか、誰がどうしたというような話であった。要するに、先生の頭の中にあつたものは、一にも二にも福音のことであり、ただただ信仰のことであり伝道のことであつたのである。唯一の例外は、言うまでもなく内村先生のことであつた。否これは例外と言うべきではなく、先生のお話の一つの中心であつたと言うべきであろう。何しろ先生は、ご自分がいつも言っておられたように、パウロと内村を語る時、ご自分のことを語っているのか彼らのことを語っているのか、わからなくなってしまう程であつたのだから。

そして私は、まずいつでも、この夢中になって話をされる山本先生に接し得たことを、何よりも光栄に思い、有難いことであったと思っている。

このように書くと、人はあるいは、山本先生をコチコチの「信仰家」のように思うかも知れないが、先生はまさにその正反対である。前にも書いたように、先生は、どうしてそんな事を知っておられるのかと不思議に思う程世の中のことをよく知っておられる、文字通りの常識家であられた。ある人が調べたところによると、1975年以降の先生の雑誌「聖書講義」の「東京だより」には、国際問題、外国関係に関する記事に次いで、日本及び日本人に関するものが多いが、その日本・日本人論のほぼ半分は経済問題を扱ったものだという。そして「東京だより」の最後の記事は次のようなものであった。

3月24日（土）くもり、雨。療養中の主婦に代わって、いつものように買物車を引いて近くのスーパーまで行ってくさぐさの生活用品を買った。おかげでこの頃はこまごました品の値段を大分覚えることができた。実に良いことである。興味もつきない。

先生は深い信仰に生きながら、いやそれ故にこそ、世俗のことに深い関心を寄せられる道理と常識の人であられた。この点で、先生は内村先生とそっくりであられた。

ところでその先生の信仰であるが、私はここに、山本先生の信仰の質（の秘密）をよくあらわしている（と私が考えている）、先生ご自身が語られた一つのいわば逸話を紹介したい。これは「聖書講義」第41号（1941年5月）の「東京だより」にあるもので、「双書」の「信仰所感集上」に収録してある。

物置の床板を突き破って大きな筍が二本グングン伸び出した。隣家の庭から根を張って来たものであるが実に驚くべき力である。エレミヤ

ははたんきょうを見て神の御心をさとったというが、この筈にも深い歴史的の暗示があるのではあるまいか。何にしても早く何とかしないと今度は屋根まで突き抜けられて了いそうである。子供達は良寛さんなら切らないで置くだらうというが、あんな亡国的な頽廢思想は断じて許せないから、校正がすみ次第直ちに子供達に手伝わせて断固切り倒して了うつもりである。然し禍根を断つことは六カし相である。或は今後毎年筈と戦って行かねばならぬかも知れない。

この記事に対して質問が来たらしく、先生はそれに答えて次の号に「キリスト教らしいキリスト教」と題してこう論じておられる。因みに、これは先生が41歳になろうとしておられた時の文である。

先月号に良寛のことを「亡国的な頽廢思想」と記したところ、良寛のどこが悪いのかとの質問が来た。私には子供とカクレンボウをしてかくれたまま寝込んで了うというあの童心なるものが堪えられない。あれは童心なぞというものではない。一種の病的なお人好し主義である。人生の第一義は、大人は大人らしく子供は子供らしく、男は男らしく女は女らしくすることである。大人には大人の仕事があり、義務がある。それを放棄して子供と遊び呆けているなぞは亡国の徴である。

然し仏教思想で育った日本人は皆多少ともこうした厭世思想と低徊趣味とを持って生まれている。近頃の日本的キリスト教なぞには著しくそれが著われている。信仰と悟りとを混同した卑屈な自棄的態度や、聞くに堪えない自己卑下や、右と言えば左と言って楽しんでいる自己慰安や、世の中のこととさえ言えば頭から悪口するだけで自分は何一つ手を出そうともしない卑劣な自己逃避なぞ、皆仏教の虚無思想を以ってキリスト教を解釈したものである。これは仏教的な弱々しいキリスト教である。キリスト教はモットモット強健剛毅である。一寸近づいただけでも烈しい道德的倫理的の臭いを感じしめるものである。このキリストらしさのないものは断じてキリスト教ではない。今日まで、

日本のキリスト教が争って来た敵はアメリカ流の事業教的キリスト教思想であったが、今日以降は我々は身内の敵なる虚無的キリスト教思想と戦って行かねばならない。キリスト教をモットモットキリスト教らしいキリスト教とすること。これが我々に課せられた今日の急務である。

あえて蛇足を加えれば、ここには後年の先生の塚本虎二批判の根拠が既に明らかにされている、と私には思われる。

先生の常識性について、付け加えるのを失念したので順序が前後するが、もう一つ思い出すことを書いておきたい。

内村の「英文著作集」のお手伝いをしていた頃のことと覚えているが、ある日突然先生が私に「君の奥さんの勤め先の住所を教えてくださいませんか」と言われた。何のことかと思ったら、原稿を書留で送るのに私の所は留守勝ちなので、いちいち本局に取りに行くのは大変だろうから家内の勤務先の方へ送りたいということであった。それから書留のやりとりはいつもそうして下さった。また校正でも、活版とちがってタイプや写植の場合は、抜けていたりするとその訂正は大へんなことになるが、先生はそういう場合いろいろ工夫して、ご自分の原稿を変えても字数に合わせて直してしまわれるのである。

これが先生の親切であった。先生はよく気の付く方であった。人のことを考え、人の為に思い計られる、やさしい親切な方であった。その親切は、しかし、得てして日本人が陥りがちな情動的なそれではなく、慎みぶかく、極めて合理的な、常識的な親切であった。校正の仕方などは、先生の原稿がいつも完全原稿で、字も実にきれいでわかりやすかったことと共に、印刷所で働く人のことを思っただけの先生らしい思いやりであったに違いない。しかし、もし先生にそう申しあげれば先生は少し恥ずかしそうにして、「でも言葉なんか少々変えても内容が変わらなければ、それでいいですね」と、きっと答えられるであろう。それは先生にとって親切というより、外形のことに無頓着な先生の無教會的な生き方

の、ごく自然な表われと言うべきものであるのかも知れない。

(所載) 「テコア通信」第104号

1979年11月